

逢へば

日向美菜

- 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 轉やしづかに本を閉づるひと
 剪定の両手で使ふ鉄かな
 連弾の楽譜を広げ花ミモザ
 接木せし枝に真白きリボン結ふ
 如月の旅の小さき荷物かな
 つばくろや二枚綴りの切符見せ
 飴玉を鞆に残し春休
 画材屋にひとを待ちたる遅日かな
 木苺の花や小道に乳母車
 桜蕊ふる婚礼の列ゆくあとに
 袖引けばほどけるやうに花衣
 夏きざすピアノの蓋にあご乗せて
 初夏やあたらしく買ふ旅鞆
 逢へば詩を呟いてゐる五月かな
 目の合へるさなかをソーダ運ばるる
 花柚子や手紙の長きこと謝して
 咲きそろふ百合の真中を歩きけり
 ペンを持つ指の太さや南風
 首飾り抑へて金魚覗きけり
 歩きゐて雨にまぎれてゆく浴衣
 夕顔や眠るかたちの定まらず
 カーテンのうしろのさわぐ夏館
 触れやうと思ふ日傘を閉ぢてみる
 短夜や洋酒の匂ふ葉指
 帰り来てまづ夕虹のことを聞く
 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26
 指環そのままに湖畔を泳ぎけり
 夏果や鳥めく雨の降りはじめ
 立秋の空すれすれに気球浮く
 秋草を挿しけり白き船室に
 貝殻は波にひらきて秋祭
 陽にかざす小さき花束秋涼し
 窓辺とはひとりの庭や秋うらら
 手のひらを梨逃げやうとするかたち
 夢誘ふやうなこゑなり白木槿
 うなじより洗ふ躰や秋彼岸
 古き詩を諳んじてゐる良夜かな
 海へゆくよそほひ淡し秋の暮
 飴包む紙の薄さや小鳥来る
 秘事のごと無花果を洗ひをり
 ひとのことばかりの日記金木犀
 紙の花散らばる床や秋没日
 桐箱に花瓶をしまふ日短
 遠回りして寒林の中にゐる
 初冬や小匙の沈む砂糖壺
 頼まれて髪に花挿す小春かな
 手袋は膝や車窓に頬寄せて
 手をとればスケートゆつくりと終はる
 風花の来る礼拝のまなじりに
 それぞれの本や吹雪の枕元
 毛布かけ直せば細き手の握る